

ヨハネによる福音書20章24－29節 「見ずして信じる幸い」

1A 体をもって現れた主

1B 肉体をもって現れた方

2B 肉体において苦しまれた方

1C 霊肉の癒し

2C 血を流された方

3B 確かな希望

2A 信じられなかった使徒たち

1B 死という現実

2B 罪という現実

3B 恥という恐れ

3A トマスの疑い

1B 空気を讀まない人

2B 体のよみがえりの実証

3B 見えなくともおられる主

4B 最高の告白

4A 信じる幸い

1B 目に見えない事柄

2B 目に見えない実体

3B 目に見える一時性

本文

私たちは今朝、イエスがよみがえられ、弟子たちに現れた箇所を讀みます。ヨハネによる福音書20章24-29節です。「²⁴ 十二弟子の一人で、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。²⁵ そこで、ほかの弟子たちは彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」と言った。²⁶ 八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がかけられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。²⁷ それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」²⁸ トマスはイエスに答えた。「私の主、私の神よ。」²⁹ イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」

イエス様は、ご自身が十字架につけられ、墓に葬られて、週の初め、日曜日の三日目によみがえられました。そして、まずは、墓にやってきた女たちに現れ、それから二人の弟子や使徒ペテロ

へ、ついに弟子たちたちが集まっているところで主が現れてくださったのです。19-20 節には、こうあります。「¹⁹ その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。「平安があなたがたにあるように。²⁰ こう言って、イエスは手と脇腹を彼らに示された。弟子たちは主を見て喜んだ。」イエス様が、手と脇腹を見せておられますね。それは、三日前に、主が十字架に付けられた時に、手に釘が打たれ、また脇腹に槍が刺されたからです。この方が幽霊でも何でもなく、体をもって復活されたことを明らかにするためでした。

ところがその時に、たまたまトマスが居合わせなかったのです。それで、他の弟子たちが「**私たちは主を見た**」と言ったのですが、トマスは信じようとはせずに、「**その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません**」と言ったのです。自分の手で、体をもってよみがえられたのを確かめないかぎり、信じませんと言いました。しかし、イエス様は、目に見えなかったけれども、そこにおられたんですね。八日後に現れて、トマスに対して、「**あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。**」と言われました。トマスはそれで信じるのですが、イエス様は、「**あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。**」と言われます。

1A 体をもって現れた主

私たちキリスト者の信仰、そして教会は、この二千年間、「イエスが体をもってよみがえらえた。」ということをもって続いています。それは、これらイエスの復活を目撃した弟子たちが証言していったためです。新約聖書は、これらイエスの復活を目撃した使徒たちが書いているものであり、これ自体が、イエスの復活の証言書であります。朽ちない体をもって復活し、今も生きていますと私たちは信じているので、それでキリスト者であり、また教会であります。体のよみがえりを信じないということは、キリスト教がキリスト教でなくなると言っても過言ではないでしょう。

1B 肉体をもって現れた方

その復活を目撃した弟子たちの一人、今読んだ福音書を書いたヨハネは、手紙も書いていて、冒頭でこう話しています。第一の手紙です。「1:1-2 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。2 このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証しして、あなたがたに伝えます。」聞いただけでなく、自分の目で見て、じっと見ることもできた。そして自分の手で触ることもできた。この方にいのちがあり、永遠のいのちである、と言っています。確かに肉体を持っていたことを証ししています。

いわゆる距離も近い関係でした。ヨハネは福音書の中で、イエス様が十字架に付けられる前夜、最後の晩餐の場面で、自分のことをこう言っています。「13:23 弟子の一人がイエスの胸のところまで横になっていた。イエスが愛しておられた弟子である。」当時、ユダヤ人たちの過越の祭りの食

事は横たわって食べていました。ヨハネのすぐ後ろにイエス様がおられて、イエス様の胸のところ
に自分がいたことを言い表しています。それほど密だったんですね！

日本の文化は、相手と若干の距離を取って、相手への敬意を表しますので、それほど密になり
ません。握手や抱擁の代わりに、おじぎをします。しかし中東など、世界の多くの地域では、抱擁
だけでなく、接吻もします。それほど密着する付き合いをします。そうした肌の感覚があつて、人が
人として生きられる、いのちがあると言えるでしょう。日本人とて、そのぬくもりはもちろん知ってい
ます。今、コロナの流行で一定の距離が必要であり、多くの会合がネット上で行われています。け
れども、今、デジタルでは決して補えない、肌と肌の触れ合いの感覚が必要で、それは身体があ
るからこそ必要であります。

有名な実験があります。生まれてきた赤ちゃんに、ミルクを与え、お風呂の世話、排泄の処理は
するものの、赤ちゃんの目を見ない、笑いかけない、話しかけない、つまり、生きるための世話は
するけれども、スキンシップはしないという実験です。恐ろしい結果が出ました。なんと赤ちゃんが
全員、1歳の誕生日を迎えることなく死んでしまったのです。¹身体をもって合うことが、命に関わる
ことが良く分かりますね。

天地を造られた神が、肉体をもって、人として現れてくださったのは、この目的があります。私た
ちが天地を造られた神と、イエスにあつて一つになるためです。近づくためです。人は人と生きる
だけでは足りません。パスカルは、「人間には神によってしか埋められない空洞がある」と言いま
した。天地を造り、自分の生命を造り、維持させておられる神との肌の触れ合いが必要なのです。イ
エスが肉体をもって現れたのは、それが理由です。

2B 肉体において苦しまれた方

1C 霊肉の癒し

この方が肉体を持っていたのは、その犠牲によって私たちに癒しと平安が与えられるためでした。
預言者イザヤが、預言をしていました。「53:5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たち
の咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、
私たちは癒やされた。」イエスは、その肉体において、ローマによる恐ろしい仕打ちを受けました。
鞭打ちと十字架です。その鞭の先にはガラスや鉛、骨の破片が付いていて、鞭打つと、肉片が飛
んでいきます。そして十字架は、手足に釘を刺すのですが、激痛というものではないです。そして、
死ぬのですが、呼吸困難が死因となります。手足に激痛が走るのを、体を垂らしていくのですが、
そうすると息ができません。息をするために体を持ち上げます。すると激痛が走ります。徐々に、
徐々に、殺していく道具なのです。

¹ <https://mister-yoda.com/skinship/>

イザヤは、それが私たちの背きのため、また私たちの病のためだと預言しました。その肉体において、身代わりになって苦しまれたのです。今日、多くの病があります。肉体の病もそうですが、それ以上に、社会的な病もそうですし、精神的な病もあります。なぜ癒されないか？という、犠牲がないからと言えるでしょう。コンビニでの弁当を食べるのと、お母さんが手間かけて造った弁当とでは、物理的な味があまり変わらなかったとしても、お母さんの手弁当には犠牲があるのです。自分がどんなに眠くても、いや熱を出していても、それでも朝早く起きて、弁当を作ってくれます。その愛の犠牲があつて、私たちは霊肉ともに癒されるのです。イエスは、ご自分の肉体をもって苦しみを受けられたことにより、私たちが、これまで犯して来た過ち、罪をもって負い目を持って生きてきたその痛みが、霊魂の中で癒しを受け、平安をもたらすのです。

2C 血を流された方

そして、肉体には血が流れています。この血によって酸素が体に行き届きます。また、血によって体にある毒素も洗い清められています。酸素が与えられ生きることができ、また体に有毒になっているものを除去するのです。聖書には、肉のいのちは血にあると教えています。「レビ 17:11 実に、肉のいのちは血の中にある。わたしは、祭壇の上であなたがたのたましいのために宥めを行うよう、これをあなたがたに与えた。いのちとして宥めを行うのは血である。」ですから、昔は、多くの動物のいけにえを屠って、血を流していました。自分の罪や汚れが清められ、また自分の身代わりのために死ぬためのいのちとなってくれるためです。それを、神は一手に引き受けてくださったのです。ご自分の独り子であるイエス・キリストを、肉体をもって私たちに下さり、その肉体から流される血をもって、私たちの罪を清め、洗い流し、霊のいのちを与えてくださったのです。

3B 確かな希望

そして、キリストは十字架の上で死なれました。その体は墓に葬られました。弟子たちにとって、とても悲しい出来事です。しかし、三日目に体をもって現れてくださったのです！どれだけうれしかったことか、深い慰めが与えられ、平安に包まれ、希望に満ちあふれたことでしょう。

私がキリスト者になって間もなくして、大学祭がありました。そこで留学生のサークルが主催で、「ジーザス」という映画を上映していました。イエスの生涯を描く映画です。イエスが最後に、十字架に付けられ、葬られました。しかし、弟子たちの真ん中にイエスが現れてくださいました！そこで私は涙が溢れました。涙が止まりません。そこで分かりました。「確かに私の罪は滅ぼされた。」と。罪が、確実に葬り去られて、除去して下さり、もはや罪は思い出されないことを悟ったのです。パウロは、こう言っています。「I コリ 15:17 もしキリストがよみがえらなかつたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお自分の罪の中にいます。」

2A 信じられなかった使徒たち

1B 死という現実

ところで、トマスは、ここでイエスのよみがえりを信じられませんでした。他の弟子たちも初めは

信じられませんでした。女たちが、よみがえったと証言しても、なんかたわけた話だなとして疑っていたのです。「マル 16:14 その後イエスは、十一人が食卓に着いているところに現れ、彼らの不信仰と頑なな心をお責めになった。よみがえられたイエスを見た人たちの言うことを、彼らが信じなかったからである。」彼らは、イエス様をじかに見て、三年間ぐらいいっしょに過ごしていた人たちです。そして、イエス様から、何度となく、「わたしは三日目によみがえる」と聞いていたのです。それであっても、彼らは信じられなかったのです。

それはどうしてか？ 私たちも知っていることです。「人は死ぬ」ということです。死というのは、人間すべての無差別にやってきます。すべての人が死にます。ですから、死んでもよみがえるということが、たわけた話になってしまいます。ですから、イエス様は、使徒たち、弟子たちに何度となく、丁寧にご自身を現わされました。人が死んだことも、例えば病院でしっかりと確認が必要です。復活したということは、その何十倍も、何百倍も確認が必要でしょう。主は、使徒たちのうちまだ居合わせなかったトマスのためにも、現れてくださいました。

2B 罪という現実

死という現実はいくらにも当たり前なため、どうして人は死ななければいけないのか？ という問いをすることは少ないと思います。けれども、それでも自問自答しませんか？ どうして、死ななければならぬのだろうか？ と、人の死を悲しむ時に思います。そう、人は、死ぬことに満足しているわけではありません。聖書は明確に、人は死ぬように造られていなかったことを教えます。死が人間の中に、被造物の中に入り込んでしまったと教えるからです。初めの人アダムを、神が造られて、そのアダムが神の言われることに背いたので、神との関係が切れてしまったのです。その結果、いのちの関係も切れてしまって、死が入ってきてしまいました。「罪の報酬は死です。(ロマ 6:23)」と教えています。ですから、その死の状態からよみがえったという事実は、罪の力も粉碎してくださったことを意味するに他なりません。このことも、弟子たちにとっては信じがたいことだったでしょう。

しかし人類は、やり直しができるのです。ボタンの掛け違いによって、どんなに修復しようとも、いつまでも掛け違いが続くのですが、その元になっている掛け違いのボタン、一番上のボタンを掛け直したのですから、後は、かけ直すだけでいいのです。人類のやり直しができます。いや、この世界全体のやり直しも神は、イエス様が復活したことによって約束してくださっています。そして、私たち一人一人のやり直しも約束しておられるのです。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

3B 恥という恐れ

弟子たちが信じられなかった他の理由は、「恐れていた」そして「恥じていた」ということがあると思います。先ほど見ましたが、「¹⁹ その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。」とあります。ユダヤ人を恐れていました。ユダ

ヤ人指導者にとっては、イエスは自分たちの宗教権威と秩序をぶち壊す張本人であり、弟子たちは彼に追従していった者たちです。弟子たちを捕らえたいと思ったことでしょう。ただ、ここの恐れていたというのは、それ以上のことではないかと感じます。それは、「いのちをかけて、自分の仕事まで捨ててついていって方が死んでしまった。」という強い失望感でしょう。ちょうどそれは、カルト宗教の教祖が言ったことがその通りにならなくて、社会的にバッシングを受けるような、羞恥心に近いものがあつたかもしれません。自分たちの希望が失望に終わってしまったのです。だから、もう信じるということはしたくない、という思いになっていたかもしれません。戸が閉じただけでなく、心も閉ざしていたのです。

けれども、その真ん中にイエスが現れてくださいました。幽霊でも何でもなく、体をもって現れたのです。希望は失望に終わらなかったのです。パウロは、「この希望は失望に終わることがありません。」と言っています(ロマ 5:5)。そしてパウロは福音を語る時、「ロマ 1:16 私は福音を恥としません。」とも言いました。イエスがよみがえられたので、もはや恥じることもなく、恐れることもないのです。しばしば、信者ではない方々から、身近にいるクリスチャンがどのような人たちかを次のように評価します。「芯がある」そう、一切ぶれない、何か一筋通ったものがあるということです。恥をも恐れませぬ。失望に終わらない希望があるからです。

3A トマスの疑い

ところで、このトマス、他の弟子たちみなが集まっているところに、彼だけがいませんでした。結構なキャラを持っている人です。

1B 空気を読まない人

他の箇所では、イエス様がラザロのところに行くのに、なぜか「ヨハ 11:16 私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。」と言いました。他の弟子たちとイエス様が話していることは、すでにラザロが死んでいるかどうか？ということだったのに、彼がなぜか共に殉教しようと言ったのです。今の言葉で言うと「空気読めない人」みたいな感じです。でも、うれしいですね、イエス様はトマスもこよなく愛され、このようにして現れてくださっているのですから。

2B 体のよみがえりの実証

そしてトマスは、実証的な人と言ってよいでしょう。自分の目で見て、自分の手で触らないと私は信じないと言ったのですから。しばしばトマスは「疑い深いトマス」なんていうあだ名が付けられています。けれども、私はその後のトマスの姿を見ると、彼は疑い深いというよりも、とことんまで調べる人、実証的な人なのではないか？と思います。疑うのですが、一度、それが真実だと分かると、他の人たち以上に認めます。イエス様をその場で礼拝しています。中途半端ではないのです。主は、そういう人々にも応えてくださいます。なんとなくごまかして、どっちつかずのようにしているのは、心に偽りがあるからです。そういった意味で、「疑い」というのは、神の前ですべて悪いことではなく、むしろ真剣に主を求めていく姿勢の中で用いられるものであります。

3B 見えなくともおられる主

その真剣なトマスに対して、イエス様もはっきりと語られるのです。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスが言った言葉を、そのまま使っておられます。つまり、八日前、トマスが信じないと言った時に、目には見えなくともその場におられたのです。イエス様は、体をもってよみがえられましたが、体に制約されてもいませんでした。

ここで主イエスは教えておられるのです。「わたしを見なくとも、わたしはいるのだよ。」ということです。復活の信仰というのは、肉眼で見なくとも、主は生きておられると信じ、そのことを知っていることです。ペテロがこう言いました、「I ペテ 1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。」ペテロは、自分自身はイエス様を肉眼でずっと見ていたのに、それでも信じられませんでした。しかし、手紙を書いている相手の信者たちは、見てもいないのに愛していて、信じていて、喜びに踊っていることを知っていました。その違いは、目に見えない時にも、イエス様は生きていて、確実に共におられるという確信なのです。

4B 最高の告白

トマスは、圧倒されて、こう告白しました。「私の主、私の神よ。」すばらしいですね。主と呼ぶのは、これは相当勇気が要ります。自分の人生、自分の命は、あなたの手にありますと言っているのですから。全く知らないところに、嫁ぐ若い女の人に似ているかもしれません。いや、それ以上でしょう。地上だけでなく、後に来る神の国のために、すべてを明け渡すのですから。

それだけでなく、トマスは、「私の神よ。」と言っています。これは正しい告白です。けれども、福音書ではほとんどの人がそれを告白していません。むしろユダヤ人の指導者たちが、イエス様が神と自分を一つにしている、同等にしているとして迫害し、殺そうと思ったのです。しかし今、ここにおられる方は、人として現れた神ご自身であるということです。復活によって、神の子、神ご自身だと明らかにされたのです。

4A 信じる幸い

そしてイエス様は言われました、「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」見ないで信じる人が幸いであるという、信仰の本質を教えてくださいました。

1B 目に見えない事柄

私たちは目で見えているからこそ本質だと思いがちです。けれども、実は私たちは、目に見えない事柄を信じながら、今を生きています。肉眼に見えないものに囲まれながら生きています。私たち一人一人に、頭の中に脳があると信じていますね？心臓があると信じていますね？でも、自分の脳や心臓を肉眼で見たことのある人は、どれだけいますか？レントゲンやCT、MRIなどの医療

技術で見たことがあるかもしれません。ウイルスは、今でこそ高性能な顕微鏡で見ることができませんが、その技術がなくとも理論上、ウイルスがいると発見されていました。そうでないと、感染のメカニズムが説明できなかったからです。このように、医療技術や医療知識を知っていて、自分の目で見て、ましてや触ってもいないのに、それは存在すると信じています。そして、皆さんが手にしているスマホは、無線があるからこそ情報が入ってきます。無線は目で見えますか？でも、実在していることを疑うことはないでしょう。

私たちは、目で見ているものによって生きているよりも、目に見えないものを、確実に存在すると知って、それを信じて生きているのです。ヘブル人への手紙の著者がこう言いました、「11:1 さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」目に見えないものを確信させるものであって、それで希望が与えられています。その希望が確実なもの、確かなものとするのが信仰です。

2B 目に見えない実体

なので、信じるとは妄信することではありません。実体のないものを信じ込む、思う込むことではありません。どう考えても、目に見えなくとも、そこには実体があると知って、それで信じているものです。イエスの復活を否定しようとして、かえって信じるようになったという人たちは歴史の中で、世界の中で数えきれないほどいます。イエス様がよみがえったというのは、実験は不可能ですから自然科学的な方法での証明はできません。そうではなく、法学的な、歴史学的方法です。多くの証人、数多くの文献という証拠があって、事実と認定する証明です。織田信長がいなかったといったら滑稽な話ですね、日本の中では。けれども、イエスがよみがえらなかったというのは、おそらくもっと滑稽な話でしょう。それだけ、明らかなのが復活です。

3B 目に見える一時性

そして、目に見えないけれども信じるのが幸いである理由は、目に見えるものは一時的だからです。「Ⅱコリ 4:18 私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。」目に見えるものにしたがって信じていけば、それは一時的なので落胆します。しかし、その背後にある実体に、目に見えないものに目を留めれば、失望に終わりません。永遠に続くからです。私たちは、歌謡曲とかで、男女の恋を永遠に、と、うたっていますが、目に見える関係ですね。しかし、真実の愛があります。神の愛です。永遠の愛です。この方は裏切ることがありません。イエスがよみがえられた、という事実を歴史の中で神は私たちにくださいました。目には見えなくとも、いや、目に見えないからこそ、永遠にまで至る愛があるのです。見ないで信じる、このことをしてみてください。主は生きておられます。